

統合失調症という病気をご存じでしょうか。かつては「精神分裂病」と呼ばれていた病気です。大学生の多くが該当する10代後半から20代前半は、この病気が始まりやすい年代と言われています。精神障害への理解を深めるためにも、この病気のことについて触れておくのは意義あることと思われま

治療の進化を示す名称変更

「精神分裂病」も統合失調症も、英語は同じ schizophrenia です。日本語訳が変わったのですね。「精神分裂病」という訳語は、恐ろしい不治の病というイメージを与え、差別や偏見を助長するとして、訳語が変えられました。

かつては薬の副作用も強く、長期の入院を要するケースが多く、幻覚や妄想などの症状が周囲の人から理解されにくいということもあり、治療に関わる人たちの絶望が投影された訳語でもあったのでしょう。

現在は、副作用がより少なく、汎用性の高いお薬があり、病気を抱えながら社会生活を送ることも可能になってきています。統合失調症という訳語は、「精神機能がまとまりもった働きをできない状態」というこの病気の実態を、より冷静に捉えていると言えそうです。



どのように始まるか



統合失調症の代表的な症状は教科書的に言えば幻聴や妄想ですが、最近はこの症状がはっきり見られることが減ってきている印象があります。お薬が改良されて早期に治療を始められるようになったことや、現実の一つではないという認識が社会に広がったことも要因の一つかもしれません。

今までにない落ち着かなさ(周りから見た落ち着きのなさではなく)、自分があやふやになる感じ、当たり前だったことがしっくりこなくなる感じ、などが始まりであることもあります。精神のまとまりが悪くなってきている徴候ということですね。気になったら専門家に相談してみるのも有力な選択肢の一つです。